【十字架上の叫び】

［受難物語講解・第25回］

『マルコの福音書』

15章33～34節

熊　谷　徹

2014年4月6日（第1主日）

【序】十字架上の七つの言葉；

紀元30年4月7日、金曜日、主イエスは十字架につけられた。時刻は、25節にあるように「**午前9時**」であった。

その日、主イエスは十字架上で7つの言葉を発した。「十字架上の七つの言葉」と言われている。第一の言葉は「**父よ、彼らを赦したまえ**」である。自分を十字架に釘付けにしようとしていた人達のために、「父よ、彼らを赦したまえ」と、罪の赦しを祈られたのである。十字架上の第二の言葉は、悔い改めた強盗に言った言葉；「**あなたは今日わたしと共にパラダイスにいる**」という言葉である。第三の言葉は、最愛の母マリヤを愛する弟子ヨハネに託して言った言葉；「**あなたの子、あなたの母**」という言葉である。

【1】全地をおおった闇；

こうして主イエスは、十字架上で3つの言葉を発した。その後、沈黙の時が流れた。1時間、2時間と…。 12時になった。真昼にも拘らず、突如あたりが暗くなった。日食ではない。実に不思議な闇が全地を覆った。**『マルコの福音書』15章33節**である;「**さて、十二時になったとき、全地が暗くなって、午後三時まで続いた。**」

《eg》『ペテロの福音書』という3世紀頃に書かれた書物がある。それによると、この時の暗闇は「ユダヤ全土」に及ぶもので、人々は「ともし火を持ってめぐり歩かねばならなかった」ほどであった。こう記されている；「真昼であったが、闇が全ユダヤを覆い、人々は…太陽が沈んでしまったのではないだろうか、と大騒ぎし、思い悩んだ」。

『ペテロの福音書』は外典であるが、真昼の暗闇が当時の人々に与えた不吉な予感を伝えている。この暗闇が皆既日食ではなかったことは明らかである。というのは、ユダヤ最大の祭り、過越祭が開催されていた時、即ち3月から4月であり、その時期に皆既日食は生じないからである。そこである人は、ブラック・シロッコ（シロッコ風が砂漠の砂塵を空高く巻き上げる為に暗くなる）という現象だ

ろうと推測している。それが何であれ、この時にこういう現象が起きたということは奇跡的なことである。それがどういう現象であったにせよ、この暗闇は、神の特別の介入によって生じた特別の暗闇なのである。

【2】十字架上の第4の言葉；

重苦しい沈黙と不気味な暗闇が3時間も続いた。午前9時から既に6時間、十字架上のキリストの苦しみは次第に増加して行った。心身ともに極限状態が近づいていた。

三時になった時、主イエスは、激しい苦しみの中から、力を振り絞って、大声で叫ばれた。**34節**である；「**そして、三時に、イエスは大声で、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ。」と叫ばれた。それは訳すと「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」という意味である。**これが十字架上の第四の言葉である。

「**エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ**(eloi eloi lama sabachthani)」。これはアラム語をギリシャ語化したもので、マルコ自身がギリシャ語に訳したように、「**わが神、わが神。どうして[あなたは]わたしをお見捨てになったのですか**」という意味である。

【2】第4の言葉の真意；

①マルコは、「**イエスは大声で…叫ばれた**」と記す。主イエスは絶叫したのである。このキリストの絶叫の言葉の意味を正しく理解することは極めて困難である。そのため、この言葉は誤解され続けて来た。そもそも、この時、主イエスの言葉を聞いた人達がこの言葉を誤解していた。**35節**を見ると、既にこの言葉を誤解した人達が登場する；「**そばに立っていた幾人かが、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる。」と言った。**」。**36節**もそうである。兵士達は、「**待て、エリヤがやって来て、彼を降ろすかどうか、見ることにしよう**」と言った。

彼らは、主イエスが叫んだ「**エローイ、エローイ**」という叫びを「**エーリーヤー、エ**

ーリーヤー」と叫んでいるように勘違いした。「**エーリーヤー**」は紀元前9世紀の大預言者で、終末時代に再び到来すると信じられていた。「イエスはエリヤの名を叫び、助けを求めているのだ」とこの兵士たちは思ったのである。そして、その時から今日に至るまで、主イエスのこの叫びは誤解され続けている。

②その代表的な例が、故・遠藤周作氏のベストセラー『イエスの生涯』である。彼の解釈は概略こうである;「イエスはこの時、詩篇22篇を朗誦していたのだ。その冒頭はこのイエスの叫びと同じである。だが、その終わりは神への絶対的信頼と勝利の確信で閉じられている。イエスは絶望や抗議の言葉を発したのではなく、詩篇22篇に託して勝利の歌を歌い始めたのだ」。

③しかし、もし遠藤氏が言うように神への賛美と勝利を歌いたかったのなら、冒頭の言葉ではなくて最後の勝利の部分を歌えば良かった筈である。また、この後のキリストの言葉（第5から第7の言葉）はいずれも極めて短い。「**渇く**」「**完了した**」「**父よ。わが霊を御手に委ねます**」である。臨終の時が目前に迫っていた。その他諸々の理由から、遠藤氏のような解釈は殆ど不可能だと言わざるを得ない。

そもそもこの言葉は詩篇22篇1節の正確な引用ではない（正確な引用ならば「eli eli lama ‘azabtani」となる）。また主イエスは、「**大きな声で叫んだ**(eboesen phone megale)」のであって、「大きな声で歌い始めた」とは記されていない。そもそも、延々と6時間もの間十字架に架けられた後、大声で歌を歌い始めることなど可能だろうか。もしも、勝利と賛美の箇所を歌いたかったのなら、その箇所だけを歌えば良いのである。全部で31節もある長い詩篇を最初の第1節から歌い始める必要などない。

また、この後主イエスはごく短時間の間に、第五の言葉「わたしは渇く」(ヨハネ19:28)、第六の言葉「完了した」(ヨハネ19:30)と言った。いずれもたったの一語である。そして最後に力を振り絞って第七の言葉「**父よ、わが霊を御手に委ねます**」と「**大声で叫んで息を引き取られた**」のである(ルカ23:46)。いずれも短い

言葉である。このことは、主イエスがどんなに苦しい状態であったかを物語っています。死はすぐそばまで来ていた。そのような中で、やっとの思いで叫んだ言葉、それが「**エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ。わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。**」なのである。これは、まぎれもなく「大声で叫んで言った」言葉であり、主イエスの絶叫である。

【3】御子が御父に捨てられた瞬間；

①《eg》小説家・芥川龍之介は、「これは恐るべき絶望の叫びである」と言った。我々も、芥川とは少し違う意味に於いてであるが、この叫びを「絶望の叫び」と受け止めたい。これはまさしく「神への絶望の叫び」であり、神に「捨てられた」キリストの「叫び」なのである。キリストはこの瞬間、本当に「父なる神から見捨てられた」のである。

しかし、それにしても、「**どうして**」、父なる神が最愛の御子を「**見捨てた**」のであろうか？そんなことがあり得るのだろうか？その有り得ないことがここで現実に起きたのである。それは、キリストがこの瞬間に罪人そのものとみなされたからである。宗教改革者ルターはこう言った；「この瞬間、主イエスは呪われた者としての苦しみを味わわれたのである」と。パウロは、『コリント人への手紙第二』5章21節でこう語っている;「**神は、罪を知らない方を、私達の代わりに罪とされました。それは、私達が、この方にあって神の義となるためです**」。

このパウロの言葉が、キリストのこの叫びの謎を解く鍵である。「**罪を知らない方**」とはキリストのことである。キリストは罪無き神の御子である。神は、最愛の御子キリストを「**私達の代わりに罪とされた**」。私達の罪をキリストに背負わせ、私達の代わりにキリストを罪人として、私達の罪を裁いたのである。罪に対する裁きを受けた瞬間、それがこの瞬間だった。その時、キリストは「神から見捨てられた者」として叫んだのである;「**エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ。わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。**」と。

②もう一つ、重要なことを付け加えておきたい。それは、「**どうして**」と訳された言葉(eis ti)には、「**何のために**」という意味があるということである。即ち、キリストのこの叫びは「**わが神、わが神。《何のために》わたしをお見捨てになったのですか**」という意味も込められている、ということである。それでは、父なる神は「何のために」キリストを「見捨てた」のか？

「**何のために？**」…それは、「私達人間の罪を赦すために;人類を救うために」である。神は義なる神である。神の義は罪を裁く。そうでなければ「神の義」が立たない。義なる神は、同時に愛の神である。罪を裁くと同時に罪人を愛するお方である。神の義と愛が「クロス(交叉)」した場所、それが「ザ・クロス」「十字架」なのである。義なる神は、罪無き御子に人間の罪を背負わせることによって、人間の罪に対する裁きを行なったのである。それによって、人間を罪と滅びから救おうとされたのである。これが罪なきキリストが十字架で死なれた死の意味である。これが十字架でキリストが神に見捨てられた理由である。神は私達を救うために、私達を見捨てる代わりに十字架上のキリストを見捨てたのである。

③キリストは、「**わが神、わが神。《どうして》わたしをお見捨てになったのですか。**」と絶叫された。「**どうして**」キリストは神に見捨てられなければならなかったのか？…それは、罪人を救うためにそれが必要不可欠だったからである。罪なき神の御子が罪人の身代わりとなって罪の裁きを受けなければならなかったのである。

主イエスは「**わが神、わが神。《何のために》わたしをお見捨てになったのですか。**」と絶叫された。「**何のために**」キリストは「神に見捨てられ」ねばならなかったのか？…それは、「赦すため」である。キリストはすべての人を赦すために十字架に死なれたのである。キリストは、その手足に釘を打ち込んだ兵士を赦すために;十字架上の強盗を赦すために;十字架の下で罵る人々を赦すために、十字架に死なれたのである。神は私達の罪をキリストに負わせ、罪無き方を「罪」として、その罪を裁いた。その裁きの瞬間、キリストは「神に見捨てられた」のである。私達罪人を罪と滅びから救うため、私達の罪を赦すために、キリストは「神に捨

てられた」のである。

キリストが私達の代わりに神に見捨てられたからこそ、私達は神に見捨てられることはなくなったのである。神が、私達罪人を見捨てる代わりに、最愛の御子キリストを見捨てたからである。それは、私達を愛して下さったから;私達が滅びるのを悲しまれたから;私達を救いたかったからである。キリストが神から見捨てられたのは、私達を罪と滅びから救うため;私達の罪を赦すため;私達が永遠の命を持つためなのである。聖書は告げる;「**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。**」…『ヨハネの福音書』3章 16 節。

【結】「わたしはあなたを決して見捨てない」(ヘブル13:5);

①最後にジェームズ・ストーカーの名著『キリストの最期』の一節を紹介したい。彼はこう書いている;「この叫びそのものは絶望の声かもしれないが、しかし強い信仰を含んでいた。彼が両手で永遠者をいかにしっかりつかんでおられるか、『わが神、わが神』という言葉を聞くがよい。これは祈りである。(中略)『わが神』と呼び得る人は決して見捨てられない。(中略)イエスは、絶望の叫びをあげることによって、絶望を克服された。神に見捨てられたと感じて、神の腕の中に飛び込んでいかれた。すると、神の守りの御手は、暖かく彼を抱きかかえた」(村岡崇光訳)。

ストーカーは「『わが神、わが神』という言葉を聞くがよい。これは祈りである」と言った。キリストは最後の最後まで「わが神」と祈っておられた。十字架上の第一の言葉は「**父よ。彼らを赦したまえ**」という祈りであり、最後の言葉は「**父よ。わが霊を御手に委ねます**」という祈りだった。

また、ストーカーは、「『わが神』と呼び得る人は決して見捨てられない。」と言った。彼が言うとおりである。絶望の淵の中から神に向かって「**わが神**」と叫ぶことのできる人は、決して見捨てられることはないのである。

②キリストは十字架の上で、「**わが神、わが神。《どうして》わたしをお見捨てにな**

ったのですか。《何のために》わたしをお見捨てになったのですか。」と叫んだ。キリストは私達を救うために「神に見捨てられた」のである。キリストの十字架の死のゆえに我らは罪を赦され救われたのである。キリストが「我らのために」十字架にかかり、「我らの代わりに罪とされ」、我らに代わって罪の裁きを受けた。それゆえにキリストは「神に捨てられた」のである。そして、キリストが神に捨てられたが故に私達は罪を赦されたのであす。「**キリストの打ち傷の故に、私達は癒され**」(1ペテロ 1:24)、救われたのである。キリストは私達を救うために神に「**見捨てられた**」。そのお方があなたにこう仰っている;「**わたしは決してあなたを離れず、あなたを《見捨てない》。**」…『ヘブル人への手紙』13章5節である。◇